

吉田慶多朗君を偲ぶ

田中謙二

「こんなことが起こるのだろうか」。彼の死の1週間後、三村先生との定期面談で私と三村先生の二人が呟いた言葉である。吉田慶多朗君は、2020年6月12日の未明に、くも膜下出血で亡くなった。29才の若さである。

吉田君は、私の慶應生活と共に歩んできた。三村先生が教授に就任されたのが2011年。三村先生の寄附講座設立構想に応じたのが私で、私が慶應に着任したのが2012年。その着任時に、吉田君は卒業研究生としてラボに加わった。三村先生の友達が東京薬科大学で教授になり、10名近くいる卒業研究生のうち、外の施設で研究を希望するものを集ったところ手を挙げたのが吉田君で、大学4年生の彼を慶應へ送ってもらったという次第である。

仮設D棟の2つの部屋を使わせてもらい、一つはマウス飼育部屋兼実験室、もう一つは居室兼実験室という最小の規模で寄附講座がスタートした。床の張り替え、飼育ラックの搬入など、ゼロからのスタートである。はじめの1年は、マウスの遺伝子診断ができてホッとする、マウスの脳切片を作れてホッとするといった、やれて当たり前のことを、新しい場所で再現することに終始した。それを終始、そばで見て吉田君は育った。

医学修士課程、博士課程へと進学した彼は、ラボに新しく加わるメンバー、ラボを訪れる研究者からスポンジのように知識と技術を吸収し、誰よりも実験が上手になった。私のラボでの勉強では不十分と考え、東京大学薬学部の池谷裕二先生のラボに4年生から出稽古に行かせた。池谷研は、40名近い学生がおり、学生だけで運営する勉強会がある。そこに放り込んだ。その勉強会への参加は、亡くなる直前まで続けていた。

実験量が多く、質が高く、見切りも早く、成果を出すのも早くなり、いつしか基礎神経科学の若手として注目されるようになった。池谷研の鼻息荒い東大生からも「吉田さんはただ者ではない」と認められていた。何が良かったかというと、1) 手先が抜群に器用 2) 解析が速い 3) figureが綺麗な3つに集約されると思う。英語を書くのは発展途上だったが、figureの構成から、高い論理的思考がうかがえた。そのため私は論文を直すのが楽しかった。

Nature Neuroscience という雑誌に論文を掲載させるには運も実力も必要になる。彼は学位の仕事がこのトップジャーナルに掲載させた。古くから、海馬から側坐核へ神経投射がある

ことはわかっていたが、多くの研究は報酬行動における空間認知という各々の脳領域のキーワードを組みあわせただけのつまらない研究に終始していた。彼が発見したことは、誰も予想しなかった海馬の機能だった。Goal-directed behavior 中に、まさにその行動中に、腹側海馬（ヒトにおける anterior 海馬）CA1 神経の活動が下がることを見いだした。活動低下が持続することが、意欲行動の持続に必須であることをオプトジェネティクスを使って証明した。さらに、その活動低下が、正中縫線核セロトニン神経から放出されるセロトニンによって制御されること、海馬セロトニン 3a 受容体を介することまで解いた。不安な状況で腹側海馬の活動が高まることはよく知られた事実であり、不安な状況ではねばり強く仕事を続けられないことも直観として理解できる。この神経基盤を解いたのが吉田君である。

大学院在学中に応募できる日本で最高の学術賞が、日本学術振興会の育志賞である。彼は 2020 年 1 月に育志賞を授賞した。2020 年 4 月には、いわゆる学振ポスドクのトップに与えられる SPD に採択された。夏からテキサスオースティンに妻子をつれて留学するはずが、コロナ禍でいつになったら留学できるのだろうか、などと話していたところだった。

吉田君は、MD ではない学生・研究者が、慶應医学部で成長していくロールモデルだった。決して裕福とはいえない環境で、学費と生活費を捻出し、研究に邁進した。研究を楽しんだ。その昭和の臭いのするハングリーさは、今の大学院生には珍しいからこそ彼は輝きを放っていた。私にとって、吉田君という人物と 8 年間を共にし、学生がどんなきっかけで伸びていくのか、学生の成長をどのようにして待てば良いのか、など多くのことを学ばせてもらった。

惜しい。大きな損失だ。彼にしかできないウルトラ Q の実験手技があった。今後、多くの発見が彼から出されただろうにと思うとやりきれない。彼を失ったやりようのない気持ちは、ご遺族の皆さんにとってははるかに大きいことだろう。吉田君のご冥福を祈る。